

G-06

観光を熟議する—— 旅と日常のあいだの民主主義

田邊 裕子 (東京大学大学院総合文化研究科 / IHS 博士課程1年)

宮田 晃碩 (東京大学大学院総合文化研究科 / IHS 博士課程1年)

私たちのポスターは「観光を熟議する—— 旅と日常のあいだの民主主義」というものですが、おとし私たちの学生のIHSの自主企画として熊野古道に行って研修を行ないました。熊野古道語り部の会という会がありまして案内していただいたのですが、それはしっかりした自治の中で組織されているもので、その活動から着想を得たというのが私たちの発表です。

そもそも問題設定として、環境に関して、自分たちの環境であるという意識がどういうふうに見えるのか、それが根本的な問題だと思うのですが、これに対してその地域コミュニティの外部と関わるアクターとしての語り部、それに着目するというものです。そもそも語るっていうのは、何かあらかじめ有している知識ないし理解というものをそのまま固定的に渡すというのではなく、むしろ聞き手とのあいだで動的に生成してくるものであろうと、であるからその中で自分たちの理解そのものを問い直される、だんだんと形をとっていく、そのプロセスに着目して考えられないかということです。つまりここで語り部とっているのは、自分たちの環境というものを言葉を通して形作っていく、そういう役割をになう人々のことです。

私たちの提案というのは、その民主主義の土台としての私たち、自分たちの語りというもの、これが醸成されるのは語り部の役割を通じてなのではないか、ということになります。ポスターでは語り部の役割というものを図式化し、様々なケースを3種類の外部に分類しました。それを公共の組織と市民、過去や未来の生活者、観光客というふうに表示しています。このように分類して考察するための地図としました。私たちが検討するべきだと考えているのは、普段特別に意識しない、環境と日常というものを語り部がどのようにして言葉にし、コモンズとしての自覚をもたらしようということかということです。

コモンズとは住人が共同で管理する地域空間と、それを利用する社会関係をさす概念です。ある共同体におけるコモンズの意識化を助けるための地図として、この図を活用できるのではないかと考えています。以上です。

2018年10月27日(土) | 第14回都市環境学セミナー「都市環境と市民生活」

「観光を熟識する—旅と日常のあいだの民主主義」

池田裕子, 京大基礎 | 東京大学大学院総合文化研究科 | PhD 博士課程

概要

そもそも環境に関して(自分たちの環境)という言葉をどのように醸成されるのか。この問いに対して、私たちは地域コミュニティの外部と関わる「語り部」の役割に着目しつつ考察した。ここでは「語り部」とは、《自分たちの環境》を言葉を通して制作していく役割を担う人々を想定している。彼らの語りを通じて、民主主義の土台としての(自分たちの語り)が醸成されるのである。

以下の図は、「語り部」と具体的な地名との関わりを3種類に分類してマッピングしたものである。私たちは普段、環境と日常を、特別に意識せずに生活している。私たちが確信すべきなのは、その自明な環境を「語り部」がどのようにして「コモンズ」としての自覚にもたらしているのかということである。「コモンズ」とは、個人が共同で管理する地域空間と、それを利用する社会関係を指す概念である。ある共同体における「コモンズ」の醸成化を助けるための地図として、この図を活用できるだろう。

外部の人々

公共の組織と市民

別の土地に暮らしているが関係しうる人々
 ・日常言語とは異なる専門的な言葉が共通とされる領域に属する(行政など)
 ・特定の課題に連带的には利害関係を持たない

過去や未来の生活者

同じ土地に暮らす、別の時代の人々
 ・直接対話することができない
 ・時代によって技術や価値観が大きく異なる

観光客

別の土地から楽しみ訪れる人々
 ・非日常を期待している
 ・外部の価値観を持ち込む

具体的なケースとこれまでの議論

小平市での新道32号線に関する住民投票運動
 「鉄道の建設は小平市の自然環境にあり、東武沿線の人にとってほかにない地域の価値」にもかかわらず「青楓舎の二人に一人が住民投票に参加した。(関分、12頁)」

長野川可動橋に関する住民投票運動
 「市民投票を成功させるにはビジョンと論議性が重要。『自然保護などメンタルに訴えることで神聖を集めていけ』と言われていたが、それでは『争点は争点ではない。結論を出すことができます。(村上、106頁)』

・誰が意思決定に関わるべきなのか考えられる
 ・関係するひととの範囲を広く保たれる

語り部によるイシュー化とは
 もともとある環境の問題として顕在化する

イシュー化
 ある現象が問題として可視化されること

具体的なケースとこれまでの議論

「道野動物」(1971)
 長野県高井が道野地方の道野を記録・保護し(1971年に発表、道野会では2009年から「語り部1000人プロジェクト」として子どもから大人まで幅広い年代の個人を「語り部」として発掘・育成する取り組みが進められている。

「野川の語り部」(1977)
 長野県民の自然に結びつけた山と動物に関する地名を、学校教員の松山義雄が記録者として収集したものである。

・生活の痕跡を過去の人やこれから生まれてくる人と共有することで、環境の持続を実感できる
 ・蓄積された語りを生かすための来場者の機会として利用可能

語り部によるアーカイブ化とは
 ・残すべき特別なものを発見する
 ・記録して管理する

アーカイブ化
 古い記録をまとめて保存すること

具体的なケースとこれまでの議論

アニー「観光の美しさ」(1995)
 観光客に観光地に「多目的」があることを認識して誘導を促す。

長野県道「語り部の会」
 1990年設立。世界遺産・長野県道を案内するために歴史や文化の生きた知識を持った語り部を養成。語り部として認められるには、自分らの語り方を確立しなければいけない。案内は少人数制にして生まれ、語り部の継承も求められることによる。

・歴史的な出会いによってコミュニティの可能性を開いていくものとしての「観光客」
 (例: 東浩紀「アンロン」 観光客の管見)。

それまでの観望が外部の文脈の上で価値付けされ外部の人々との対話の機会が増える

語り部による風景化とは
 観光客と「語り部」が共に環境に身を置いて、環境に付与する意味を生み出す

風景化
 空間を意味に染み付けたものとして捉えること

語り部のほたらき

醸成されたコモンズ

- 課題① 私的な生活のレベルの言葉や知識と、公的な行政のレベルの議論との乖離
- 課題② 地域の理解や連携、運動などの一過性
- 課題③ 身体的に体験される環境の自明性、閉鎖性、観光資源の一方向的消費

意識されない環境と日常

【参考文献】

関分、アニー、私的な生活のレベルの言葉や知識と、公的な行政のレベルの議論との乖離、1995
 池田裕子、公共空間、都市環境学と市民生活、2018
 池田裕子、道野川可動橋に関する住民投票運動の経緯に関する一考察、都市環境学と市民生活、2018
 池田裕子、道野川可動橋に関する住民投票運動の経緯に関する一考察、都市環境学と市民生活、2018
 池田裕子、道野川可動橋に関する住民投票運動の経緯に関する一考察、都市環境学と市民生活、2018

東京大学の「語り部」1000人プロジェクト—道野動物の記録から
 ©2018 The Japan Association of Urban and Environmental Studies. All rights reserved.
 池田裕子、道野川可動橋に関する住民投票運動の経緯に関する一考察、都市環境学と市民生活、2018
 池田裕子、道野川可動橋に関する住民投票運動の経緯に関する一考察、都市環境学と市民生活、2018
 池田裕子、道野川可動橋に関する住民投票運動の経緯に関する一考察、都市環境学と市民生活、2018